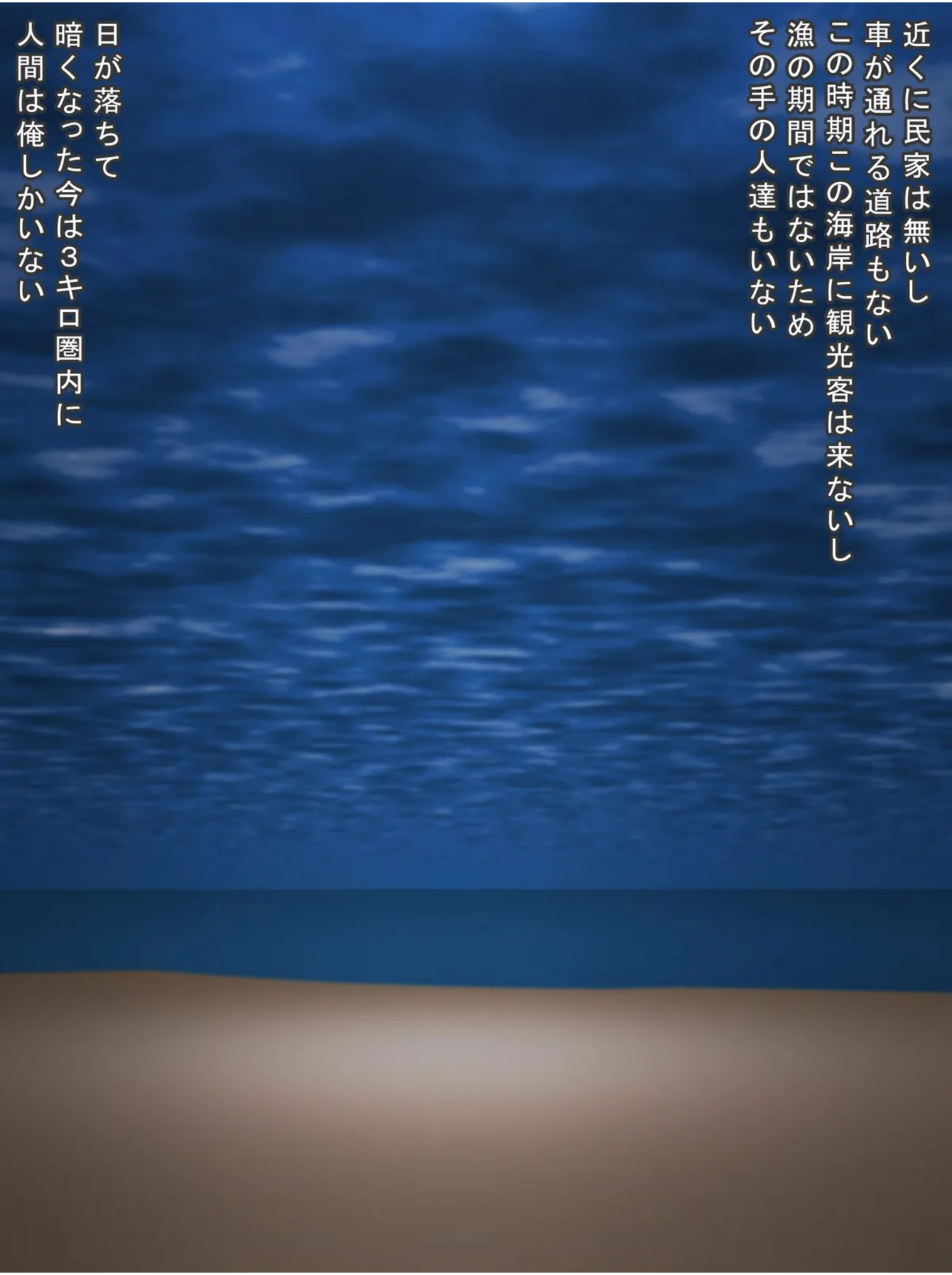
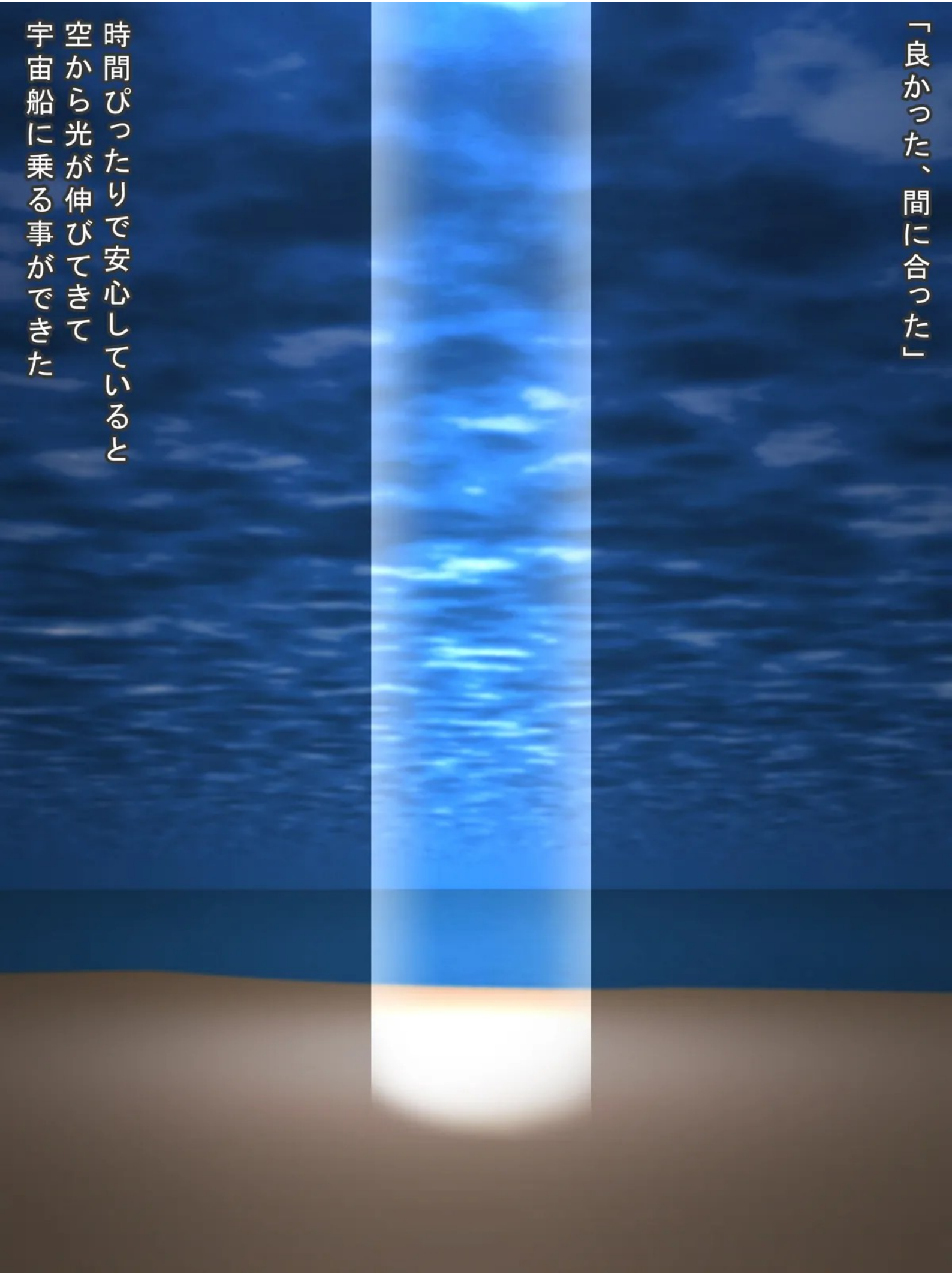

「はいもしもし…
わかりました
すぐにそちらに向かいます
すいません先輩
この書類は明日でも大丈夫ですか？」
「ん？あぁ、別にいいがどうしたんだ？」
「では行ってきます」
「お、おう…」
「おかしいな…」
「何だ？急ぎの用事ほったらかして
外回り行っちまったとかか？」


「あぁいえ、違うんです
これは明日中でもいいんですけど…
そもそも
午前中で外回り終わって
暇だって言うからこの仕事ふったんです」
「ふーん、忘れ物でもしたんじゃないか？」
「そんな風には見えなかったような…うーん」
「まぁそのうち帰ってくるだろう」

俺は会社を出たあと
急いでタクシーに乗った

そして駅へ向かい
そこから電車で三時間
そこから更にバスと徒歩で一時間移動して
海岸に着いた


近くに民家は無いし
車が通れる道路もない
この時期この海岸に観光客は来ないし
漁の期間ではないため
その手の人達もいない
日が落ちて
暗くなった今は3キロ圏内に
人間は俺しかいない


「良かった、間に合った」
時間ぴったりで安心していると
空から光が伸びてきて
宇宙船に乗る事ができた


：
部屋の中だ
何で俺はここに来たのか
分からない
達成感はあった
怖くないのが怖い
…これは聞こえるか？
音が聞こえるのではなく
頭の中に直接声が
聞こえてくるような
このような形をとって申し訳ない


君を傷つけるつもりはない
約束する
ここまでの君の行動だが
君の持っていた通信機を
通して催眠をかけて
ここまで誘導した
指示に従うほかに
恐怖心を取り除いたり
幸福感を味わえる効果も付けた
目的を円滑に果たすためだ
声の主の話を聞いていると
いつのまにか部屋に誰かが居た
大きな黒い布を被っている


目的を果たした後
君の身体に悪影響が及ぶことは無いし
地上に帰った後の心配もいらないよ
だから安心して協力してくれ
さっそくだが目的を伝えるよ
我々は人類の種が必要なんだ
君と交配をさせて欲しい
…今なんて言った？
交配と言ったか
俺は宇宙人と
セックスさせられる為に
ここまで連れてこられたのか？
目の前のソレは被っていた黒い布を脱いだ


まさか宇宙人なのか？
意外と人類に似てるんだな
我々は体をある程度
変化できる種族なんだ
我々の仲間が代表して
君と交配する
人類の種で妊娠できるよう
身体の構造を変化させた肉体でだ

外見についてはすまない
我々ではここが限度だ

ただ生物的には
君の本能が種付けするのに最も適したメス
と判断するよう設計された
完璧な肉体だ

この肉も香りも
君の本能が好む形に
なっている

説明が長くなった
そろそろ催眠も解け
本能が顔を出す時間だ
それではよろしく頼む




ズリ
ズリ


ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ


逃げないと分かっていても
俺は本能のまま
全力で押さえつけ
ギッ
グッ…
ドプッ
ブビュ
子宮内めがけて
大量の精子をぶちまけた


一発で収まるわけなく
ビュ～～～！
ブビュ～～～
射精しながら腰を打ち付けた
ブチュ
ブチュ


ズッ
ズッ
ドッ
ドッ


ブビッ
ブビッ


女はじっと見ている
だがそんな事が気になるのは
射精した直後だけで
ビクビク……
すぐにまた性欲が蘇る
足りない！全然満たされない！
ドバドバ

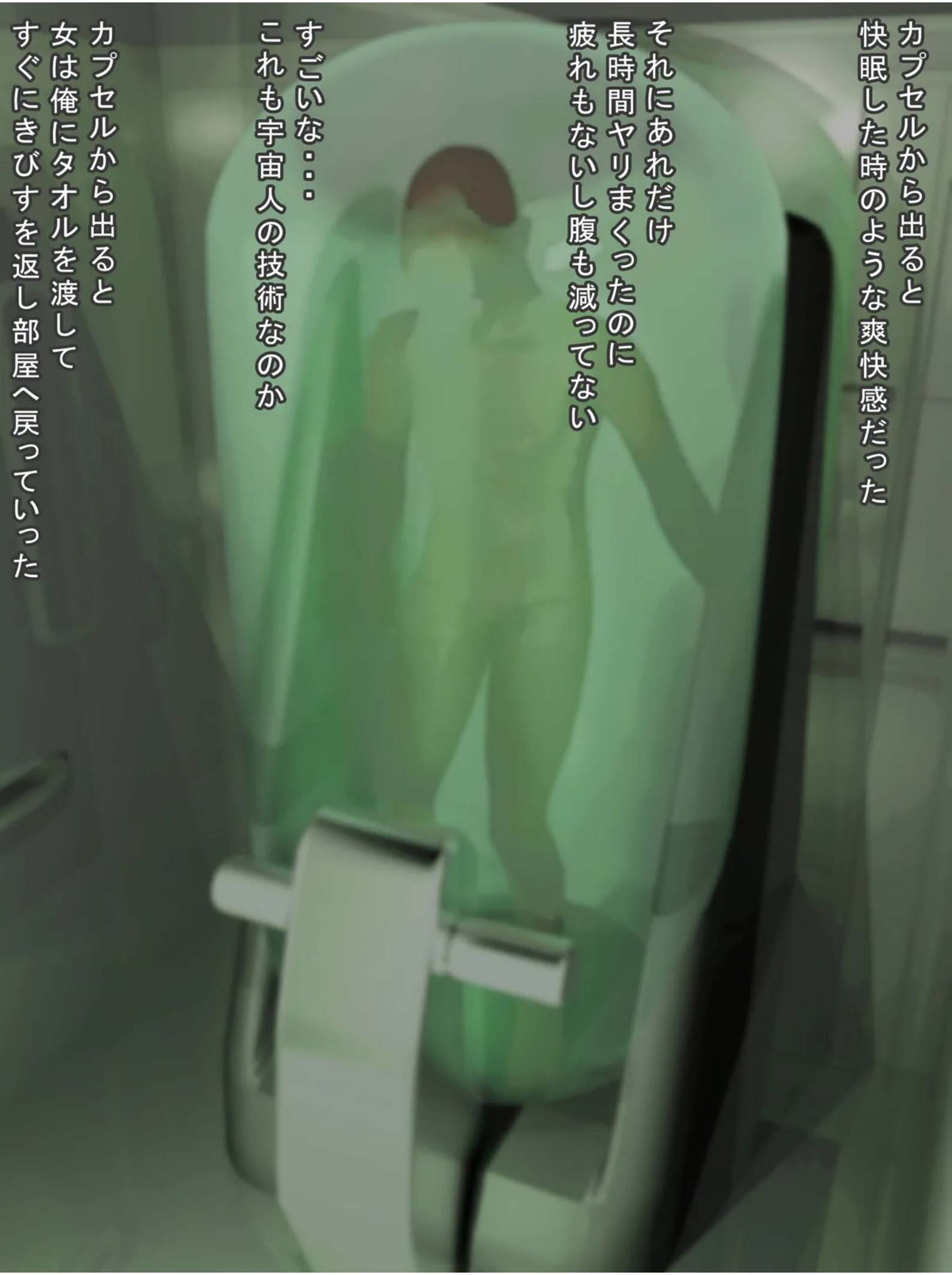

…何時間経っただろう
まだ腰を振ってる
かなりの量を中に射精していた
結合部から
愛液と精液が混ざり合った汁が
汚い音を出しながら溢れてくる
あいかわらず女は
そんな事を何とも思っていない様子だった
まだまだもっとヤリたいのに
呼吸が辛いし汗が止まらない
体が悲鳴をあげていた


ズブッ
ズブッ
ギシギシ


ビュルルル


今まで通り
目いっぱい女の中に射精した後
ブビュ～～～～
俺はこのあと気を失った


気が付くとカプセルに入っていた
メロンソーダみたいな色の液体に
満たされたカプセルの中
液体に覆われてるのに
呼吸ができるのは奇妙だった
気が付いたかい
体調は万全になったようだね
準備ができたら続きを頼むよ


カプセルから出ると
快眠した時のような爽快感だった
それにあれだけ
長時間ヤリまくったのに
疲れもないし腹も減ってない
すごいな・・・
これも宇宙人の技術なのか
カプセルから出ると
女は俺にタオルを渡して
すぐにきびすを返し部屋へ戻っていった

カプセルで目を覚ました直後は
休憩したおかげか
だいぶ落ち着いていた

だが
タオルを受け取る際に
少しだけ香ってきたあの女の匂いのせいで
また本能のような
異常な性欲が蘇ってきた

すぐにあの女を抱きたい
あの女を抱いてまた
何度も何度も中に射精したい

俺は女を追いかけ
その場でヤリはじめた

もちろん女は抵抗しなかった


ズボッ
ズボッ
ズボッ
ズボッ


ブビビビビビビビビ
ドププッ
ムニュゥ


肉棒をねじ込んで擦りつけ中に射精する
それをひたすら繰り返すだけ
ブビュ
一刻も早くメスを孕ませる
それだけが目的の獣のような交尾を続けた
ビュ


ズブッ
ズブッ
ゴッ
ゴッ


ブビュッ
ドプッ
ドプッ
ゴポッ


ベットに来るまでに
十回ほど射精した
ここまでの道の床が
お互いの色んな汁で
汚れてしまった
収まる気配は
以前として無い
ブビュ
ビュ…
モミ
グチュ
グチュ


ゴゴゴ
ゴゴゴ


ドプッ
ドプッ
ドプッ
ビュッ
ビュッ

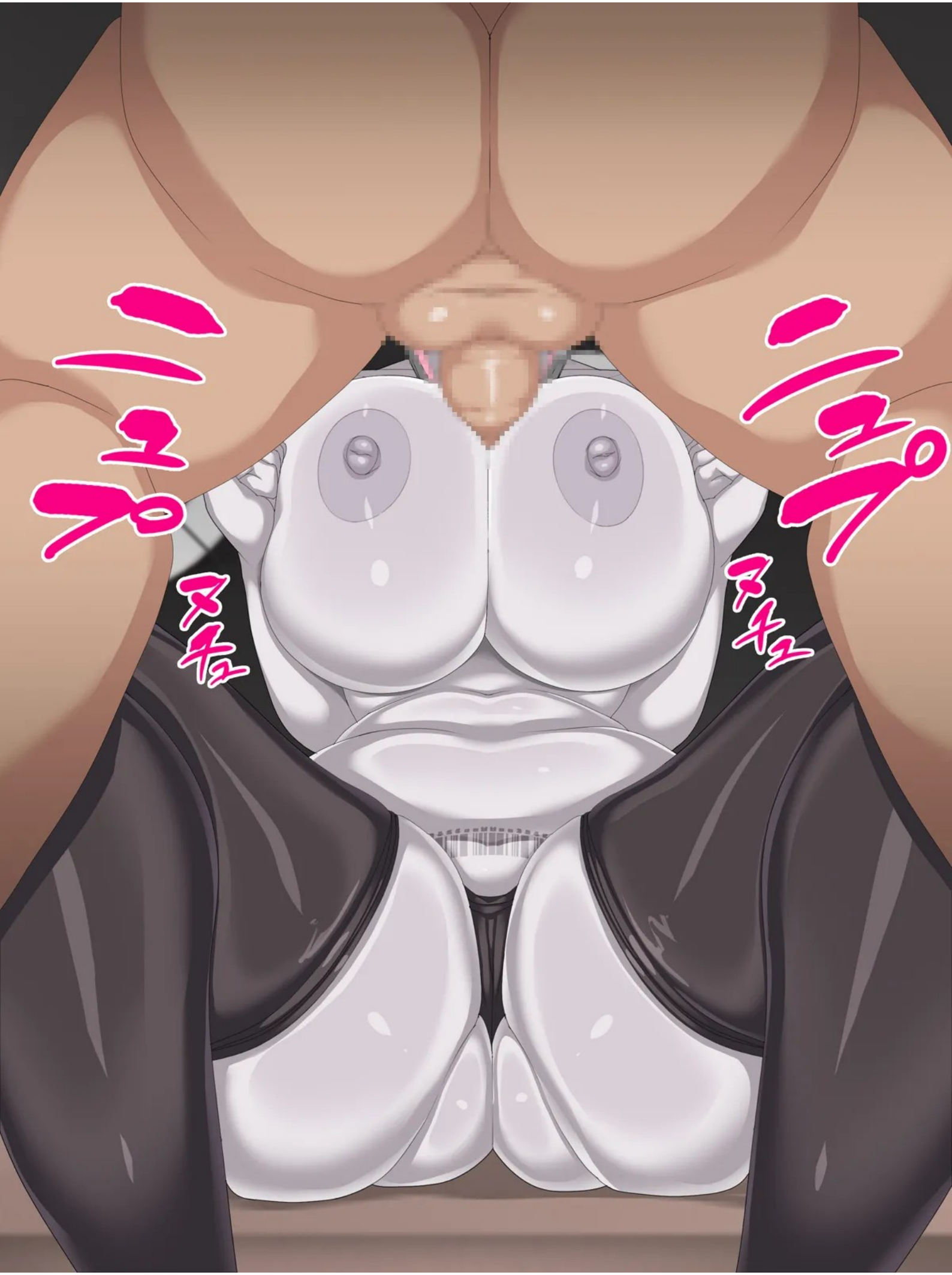

顔や身体に出された精液を
全て舐めとってくれる
レロォ
グチャ
興奮してくる
こういうのも良いな
またやろう


あれから何日経ったんだ
カプセルと部屋を行き来して
俺は女と交配を続けていた


ズブッ
ズブッ
ダポッ
ダポッ

ズブブ
ズブブブブブブ
ムニュ
ムニュ


グチュ
グチュ
今日もまた気絶するまで
この女の中に全て注いでやる


ムニュ
ムニュ
ムニュ


ブビビビ…
ドプッ


なぜこんな事を？
いつも無表情だけど
そんな顔で見ている気がした
声の主も不思議そうに
聞いてきたが
パイズリが好きだから
それ以外に理由なんてない


母乳も出せるようだ
正直この液体が
本物の母乳かはわからない
いや、違う気がする
何というかこの女の
香りを凝縮したような
性的興奮を異常なほど感じる
ものすごく美味い
ズズ
ズズ


ドプッ
ギュルルギュ～～～
ブビュ～～～


こんな事をしても
この女は絶対に嫌な顔などしない
この行為に興奮を覚えた
クセになりそうだ
ヌチュ
ヌチュ


ズゴゴゴ
ズゴゴゴ


ドプッ
ブビュッ…
ドクッ
ビュッ


そういえば今日は
珍しく女が積極的に
グッグッグッ
ブビュ～
自分から動いているな


ちょっと眠くなってきた
何週間ぶりだろう
気絶する事はあったけど
眠くなるなんて
ここにきて初めて
じゃないか
きもちよかった、あぁ、もう…


「よし書類にミスは無いな
お疲れ様」
「・・・」
気が付くと会社にいた
「今日はもうあがろう」
「え？あっ、はい・・・」
「じゃあお先に」
そう言うと先輩は帰っていった


スマホで日付を見る
海岸へ行った日から3日経っていた
…3日？
どうなっているんだ
俺はあそこで一ヵ月以上過ごしたはず
3日なんて事あるか
「お疲れさ～ん、どうした？」
「ど、どうも、あの・・・」
上司にそれとなく聞いてみたら

俺は宇宙人に会った日以降も
いつも通りに出社していたらしい

「それじゃあ俺も帰るよ」

「お疲れ様でした…」

そういえば
地上に帰ったあとの心配はいらない
宇宙人は言っていた

その結果なのか？何したんだ
それになぜ急に終わったんだ

ハッキリしない気持ちのまま
俺は家に帰った

おかえり


あの声だ
交配は無事に成功した
感謝する
ちなみに君が宇宙船で過ごした時間は
地球上の時間換算で43日間
宇宙船のあの部屋だけ
極端に時間の流れを遅くしていた
地球上では3日が経過した
やっぱりか
それくらい経ってるはずだ
それでも3日間は過ぎてる
どうしたんだろう


君の関係者全員に催眠をかけた
彼らは君が居ない事に気付いていない
君のやるはずだった事も
帳尻が合うよう動いてもらった
そして今日
君が目を覚ますと同時に
彼らの催眠も解いた
明日から君は日常に帰る
任務を終えた我々も
これで地球を離れるが
その前にプレゼントがあるんだ
プレゼント？


宇宙船で交配した宇宙人だ
思い出して少し身体が反応しかけた
日常に支障をきたすから
君の身体が過剰に反応しないよう
少しだけ変化したそうだ
プレゼントというのは彼女だ
君に興味をもったようで
一緒に暮らしたいそうだ
はい・・・えっ！


心配はいらない
地球上の君以外の生物には
彼女が一般的な人類に見えるよう
迷彩を施しておいた
いやそういう事では
わかっているよ
生活するうえで必要な物を用意しておいた
そういえばソファーの上に
見た事も無いほどの大金が転がってる
それと国民と証明できる書類


地球上の色んな事を
彼女に学ばせてあげてほしい
それでは君が亡くなった後に
彼女を回収に戻ってくるよ
それまでよろしく頼む
・・・
「よろしくお願いします」
「しゃべれるんだ・・・」
おしまい







